The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	お金に対する態度と死生観との関わり
Author(s)	垣生, 幸巳; 平井, 啓
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 1999, 4, p. 18-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5723
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

お金に対する態度と死生観との関わり

垣生幸巳・平井　啓

序論

死に対する態度は自己の死を体験してできるものではなく、常に生の立場から見た上で導き出されるものである。死については、①生の対極にある②生の一部である③生の延長である④生とは次元のことなるものである⑤怖いので考えたくない・結論づけたくない、など、様々な捉え方があるが、いずれにしてもこれらは生と関連づけて死をとらえているといえる。つまり、人間が死について考える際に、生はなくてはならない条件なのである。したがって死生観という言葉はそれが示すように、死に重点を置いて考える場合でも生が関わっており、丹下（1995）が定義するように「生と死の両方にまつわる価値や目的などに関する考え方」のことなのである。

以上から、死生観尺度には、死に関する因子の他に生に対する意識についての因子も不可欠であるといえる。同時に、死生観に関する従来の研究から、属する民族の文化や宗教、風土によって死生観が異なることが示されてきた。したがって死生観尺度の構成には、対象民族の文化背景を考慮に入れる必要がある。

日本人の死生観を測定するための尺度構成についてはこれまで様々な研究がなされてきたが、以上の点をふまえると中西ら（1998）の死生観尺度は従来のものより多様な因子から構成されており、信頼性が高い。ただ、全七因子中、生に関する因子は１因子、寿命観を含めても２因子と、全体として死に関する因子に偏っており、妥当性に疑問が残る。

したがって今回の研究では、中西らの死生観尺度の妥当性を、特に死生観中の生に関する因子の有用性に着目して考察することを目的とした。その方法としては、死生観が日常生活での様々な経験を通して形成される、人生観とも呼べるものであることをふまえ、一見死や生とは結びつかない日常生活上の態度を対因子とすることにした。生を死と密接に結びつけて考える状況（命に関わるような事故の経験や死別体験、人生や死についての思索活動など）への態度よりも、日常生活上の死や生とは関わりのない対象への態度を対因子とした方が、死生観が日常を通して形成されることを考慮すると、死生観尺度に普遍性を持たせることができるのではないかと考えたからである。具体的には、原岡（1990）のお金に対する態度の測定尺度を用い、お金に対する態度が死生観とどのように関わっているかを検証する。お金は日常生活を営むうえで不可欠であるだけでなく、地位や評価など社会性にも関連しており、生きていく上での個人の価値観を大きく左右するものである。その点で、死生観尺度中の生に関する因子について考察する際に、有効であると考えた。

方法

1　対象

調査対象は、近畿圏（大阪府・京都府・兵庫県）の大学に在学している大学生および大学院生198名で、そのうち189名を分析対象とした。内訳は男性82名（43.4%）、女性107名

(56.6%) で、平均年齢は21.1歳、専攻については文系151名 (79.9%)、理系38名 (20.1%) であった。

2　調査方法

調査は質問紙法で、用紙は属性がランダムになるように考慮して配布され、回収は配布者によって行われた。その際、被調査者のプライバシーの保護のため、無記名式を採用した。

なお、本調査は1998年10月から11月の期間に実施された。

3　質問項目

(1) 被調査者の属性

被調査者の年齢、性別、専攻について記入を求めた。

(2) お金に対する態度について

原岡 (1990) のお金に対する態度測定尺度は、「お金の社会的価値」・「社会における諸悪の根元」・「社会や人生を狂わせるマネーゲーム」・「お金の使い方と意義」・「金儲けと使用の楽しみ」・「お金の利用と処世術」といった6因子からなる。大学生を対象とした本研究でこの尺度をそのまま使用するのは不適切であると考え、これらの尺度構成因子を参考に、お金に対する印象、考え方を尋ねる質問項目 (計20項目) を作成した。各質問項目に対して「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の5件法で回答を求めた。

(3) 死生観について

平井・坂口・中西・森川 (1998) の死生観尺度を用いた。この尺度は、1) 死後の世界観；2) 死への恐怖・不安；3) 解放としての死；4) 死からの回避；5) 人生における目的意識；6) 死への関心；7) 寿命観の7因子、計27項目から構成されており、それぞれの質問項目に対して「当てはまる」から「当てはまらない」の7件法で回答を求めた。

結果

1　お金に対する態度因子の抽出

データ分析には統計パッケージSPSSを用いた (SPSS, 1995)。お金に対する態度について尋ねた全20項目に対し、因子数2が適当であると判断して設定し、最尤法・Varimax回転による因子分析を行った。回転後の因子パターンにおいて絶対値.35以上の負荷を持たない項目が削除され、15項目が選定された (Table1)。再びこの15項目に対し、最尤法・Varimax回転を行い、2因子が抽出された。

第1因子は「お金をもらうのはどんな場合でも嬉しいことである」や「必要以上のお金はいらない」などの11項目から成り、「お金の社会的・心理的価値」因子と名付けた。第2因子は「お金は諸悪の根元だ」や「お金が関わると何事も汚れたものになる」などの4項目から成り、「社会における悪」因子と名付けた。

Table1　お金に対する態度構成因子

項目	因子１	因子２	共通性
①　お金の社会的・心理的価値			
17　お金のある人は、お金のない人よりも幸福になれる	0.614		0.453
3　たいていのことはお金で解決できる	0.577		0.415
7　お金は人を評価するものさしだ。	0.544		0.435
18　お金をもらうのはどんな場合でも嬉しいことである	0.538		0.458
15　本当に大切なものはお金では買えない	-0.485		0.398
12　贈り物は品物よりも、お金でもらうほうが嬉しい	0.459		0.314
8　社会が豊かになるのはお金があるためだ	0.458		0.322
1　人の幸せはお金の多少とは関係ない	-0.406		0.246
13　必要以上のお金はいらない	-0.386		0.241
5　お金を使うのは楽しいことである	0.372		0.241
4　お金のためだけに働くのはむなしい	-0.367		0.194
②　社会における悪			
16　お金は諸悪の根元だ		0.748	0.606
19　お金が関わると何事も汚れたものになる		0.588	0.469
14　お金は犯罪の元である		0.528	0.419
6　世の中が不公平なのはお金があるためだ		0.511	429
固有値	3.508	2.105	
寄与率（%）	23.4	14	

2　死生観とお金の社会的・心理的価値因子との関わり

「お金の社会的・心理的価値」因子を従属変数、死生観を構成する７因子と年齢、性別を独立変数として、重回帰分析を行った（Table2)。その結果、死生観を構成する「人生における目的意識」因子、性別との間にそれぞれ有意な負の影響が認められた（$p<.05$)。また性別については、Ｔ検定においても有意な差があることが認められた（Table3)。さらに、男女差を詳しくみるために、「お金の社会的・心理的価値」因子の各質問項目について、Ｔ検定を行った（Table4)。その結果、性別で有意な差が認められたのは表に示す３項目で、項目番号７と12については負の影響が認められた。ここから、女性より男性の方が、富・名声への欲求が強いことが推測された。以上から、人生における目的意識が高い学生ほど、社会や心理に及ぼすお金の影響を認めない傾向があることが分かった。また、女性よりも男性の方がお金の社会的・心理的価値を認める傾向があり、そこには富や名声への欲が関係していることが示唆された。

Table2　お金に対する態度構成因子と死生観構成因子・年齢との重回帰分析

従属変数	独立変数		標準偏回帰係数（β）
お金の社会的・心理的価値	死生観	死後の世界観	0.011
		死への恐怖・不安	-0.032
		解放としての死	0.111
		死からの回避	0.054
		人生における目的意識	-0.203 *
		死への関心	-0.089
		寿命観	0.094
	年齢		-0.073
	性別		-0.305 *
社会における悪	死生観	死後の世界観	-0.04
		死への恐怖・不安	0.084
		解放としての死	0.17 *
		死からの回避	0.214 *
		人生における目的意識	0.032
		死への関心	-0.065
		寿命観	0.189 *
	年齢		-0.156 *
	性別		0.061

*=p<.05

Table4　お金の社会的・心理的価値因子質問項目にみる男女差（T検定）

質問項目		男	女	t
7　お金は人を評価する物差しだ	M	2.098	1.175	2.23
	(SD)	1.203	0.859	
12　贈り物は品物よりもお金でもらうほうが嬉しい	M	2.488	2.449	2.5
	(SD)	1.28	1.075	
15　本当に大切なものはお金で買えない	M	4.122	4.551	-2.85
	(SD)	1.169	0.804	

p<.05

3　死生観と社会における悪因子との関わり

「社会における悪」因子を従属変数、死生観を構成する7因子と年齢、性別を独立変数として、重回帰分析を行った。その結果、死生観を構成する「解放としての死」・「死からの回避」・「寿命観」の各因子に有意な正の影響が、年齢との間には有意な負の影響が認められた（Table2)。ここから、死をこの世からの解放であると捉える傾向がある人、死について考えることを避ける傾向にある人、人生のあり方は運命であると捉える傾向がある人、そして年齢が低いほど、お金は社会に悪影響を及ぼしていると考える傾向があることが分かった。さらに、年齢と社会における悪因子の各質問項目について、重回帰分析を行った（Table5)。その結果、年齢が低いほど、お金が関わる事件や犯罪の原因をお金そのものだとする傾向が示唆された。

4　専攻別・性別とお金に対する態度との関わり

お金に対する態度を構成する2因子について、専攻（文／理）別・性別の比較をT検定によって行った（Table3)。その結果、「お金の社会的・心理的価値」因子については男女間で有意な差が認められたが、それ以外については有意な差は認められなかった。

Table3　お金に対する態度についての専攻別・性別の差

因子		専攻			性		
		文	理	t	男	女	t
お金の社会的・心理的価値	M	-0.03	0.119	-0.68	0.301	-0.23	3.57*
	(SD)	0.919	1.282		1.15	0.799	
社会における悪	M	-0.06	0.237	-1.64	-0.083	0.064	-0.97
	(SD)	0.965	1.11		1.149	0.869	

*=p<.05

Table5　社会における悪因子質問項目と年齢についての重回帰分析

従属変数	独立変数	標準偏回帰係数（β）
14　お金は犯罪の元である	年齢	-0.18
19　お金が関わると何事も汚れたものになる	年齢	-0.171
6　世の中が不公平なのはお金があるためだ	年齢	-0.144
16　お金は諸悪の根元だ	年齢	-0.155

p<.05

考察

1　人生の目的意識とお金の社会的・心理的影響因子との関わり

「人生の目的意識」因子質問項目の内容は、人生に目的・自己の存在意義を見出しているか、人生を肯定的にとらえているかを問うものである。したがって結果から、人生に肯定的な姿勢を持っているほど、社会的・心理的欲求の充足をお金に頼らない傾向があると解釈できる。

「青少年の意識の変化に関する基礎的研究」（総務庁青少年対策本部、1995）によると、大学・大学院に在学する学生の人生観・価値観について、「金持ちになる」・「名を挙げる」という富・名声志向や「のんきに暮らす」という私生活逃避志向よりも、自分らしさを実現するという意味での「趣味にあった暮らし方をする」という自己実現への志向性が強いことが報告されている。

人生への肯定的な姿勢の現れが自己実現への志向だととらえると、今回の調査からも同様のことがいえる。つまり、自己の存在意義を見出すのはお金がもたらす富や名声においてではなく、自分らしさや才能を高めていく自己実現においてであると考えられる。

2　性別とお金の社会的・心理的影響因子との関わり

女性よりも男性のほうがお金の社会的・心理的価値を支持する結果が得られ、さらにそれには富・名声欲が関わっていることが示唆された。質問項目との分析では、「本当に大切なものはお金では買えない」という項目の得点は男性よりも女性の方が高いことが示された。以上のことから、女性は、お金を物質的欲求を満たすだけの対象としてとらえる傾向があり、それにより精神的欲求が満たされることはあっても、直接お金によって精神的欲求を充足しているとは考えにくいことが推測される。この点に関しては、性差が生まれる背景因子のことも含めて、さらに詳しい調査が必要であると思われる。

3　年齢と社会における悪因子との関わり

年齢が低いほど（最小年齢18歳）お金を社会の悪としてとらえる傾向があるという結果が得られた。また質問項目との分析では、特に「お金は犯罪の元である」・「お金が関わると何事も汚れたものになる」の２つに質問項目において、年齢との影響がみられた。ここから推測されるのは、年齢が低いほど、お金が関わった事件や犯罪の原因をお金の存在そのものととらえる傾向があるのではないかということである。

お金が事件や犯罪をおこす動機付けになりうるのは、事件や犯罪に関わった人間が他の人間よりもお金の価値（必要性）を高くとらえたときであると考えられる。つまり、事件や犯罪の原因となるのは、お金の存在も無関係ではないが、お金に事件や犯罪をおこすほどの価値があるとする判断だといえる。

このことに関しては、事件や犯罪に関する態度・考え方を測定する尺度を組み入れた、詳しい再調査が必要である。

4　解放としての死因子と社会における悪因子との関わり

Vernon（1972）は、痛みや苦しみなど、何らかの精神的・肉体的負担により生活が脅かされている人は、死をそれら苦痛からの解放、逃げ道であるとみなす傾向があることを指摘している。つまり、死をこの世からの解放であるととらえる態度には、自分が生きている現在を苦労や負担の多い状況だとする悲観的判断や、そのような状況を対処できないことへの無力感といった要因が関わっていると考えられる。一方、「社会における悪」因子は、お金が事件や犯罪といった社会悪や、社会における不平等などの元になっていると考えるほど、その得点が高くなる。したがって、これら２つの因子に正の影響がみられたのは、現在お金が関わる事柄によって、精神的・肉体的負担を感じている傾向があるためだと推察される。

しかし以上のことを述べるためには今回の調査のみでは不充分で、現在の生活に対する態度や考え方についての調査を加えて分析する必要がある。

5　寿命観と社会における悪因子との関わり

人の生と死は人力を越えたものによって支配されているという考え方は古くからあり、自然中心の生き方をしてきた日本人としての死生観を特徴付けるものである。加藤（1977）は、徳川時代から変わらない、近代日本人の死に対する態度の一つに、死を自然の秩序、あるいは宇宙の秩序としてあきらめを持って受け入れることを挙げている。つまり、人の力や意志が死には無力で、どうすることもできないことを認めることにより、日本人は死を享受（少なくとも否定しない）するのだといえる。寿命観は、人間の寿命が人力を越えた何かによって決められているという考え方についての因子である。「何か」とは、質問項目中において「運命」・「神」と表現されているが、これらは加藤のいう「宇宙」とほぼ同義である。したがって寿命観は、人力を越えたものへの信仰ともいえる。

この因子が社会における悪因子と正の影響があったのは、お金が人為的なものでありながら、どの時代を通じても社会において絶対的な価値を持ち続ける、つまり、人によってその価値が与えられるものであるにも関わらず、人の力を越えて存在しうるという性質を持つことと関わっているのではないかと考えられる。ただこれはあくまで著者の私見であり、今回の調査結果のみから以上のことを述べるのは適当ではない。お金に対する態度についての質問項目を検討した上での再調査が必要である。

6　死からの回避因子と社会における悪因子との関わり

Wongら（1987）は、死に関する思索の回避は、死をネガティブな感情をもたらすものとしてとらえた上で、そのような感情を意識の外に追いやるための、防衛メカニズムの働きであると述べている。

死に対するネガティブな態度（回避）とお金に対する否定的な態度との間に正の影響が見られたことについては、回避をもたらす感情と否定的態度を導く背景の他に、問題対象にどのような態度をとるかという個人の性格特性が関わっていることが考えられる。今回の結果のみではこれらの因果関係を検討することはできないので、改めて尺度を加えての調査が必要である。

7　まとめ

今回の研究から、お金に対する態度と死生観を構成する一部の因子との間に何らかの関係があることが明らかになった。その背景には、さらに様々な価値観・態度が存在していることが示唆されたものの、このことは、一見関係のないような日常生活上の具体的な態度と、抽象的な死生観とが関わっていることを示すものだといえる。死生観の形成や展開について考察する際には、死や生に関わる事柄との関係だけでなく、無関係にみえる日常生活上の態度も視野に入れる必要があるといえる。

死生観尺度の生に関する因子については、お金が社会的・心理的影響因子と負の関係であったが、死生観尺度中に、生への否定的態度因子や抑鬱因子、または人生への態度をもう少し具体的に測定できる因子を盛り込むと、より死に対する態度が明らかになるのではないだろうか。

参考文献

明田芳久、岡本浩一、奥田秀宇、外山みどり、山口勧　1994　ベーシック現代心理学　社会心理学　有斐閣

加藤周一、ライシュ,M.、リフトン,R.J. 1977 日本人の死生観 下巻 岩波新書
丹下智香子 1995 死生観の展開 名古屋大学－教育学部紀要教育心理学－ 42、149－156
原岡一馬 1990 お金に対する態度と価値志向Ⅰ－態度の構造と態度尺度の構成－ 名古屋大学教育学部紀要－教育心理学－ 37、199－216
平井啓、坂口幸弘、中西健二、森川優子 1998 死生観尺度作成の試み 未刊行
NHK 世論調査 1991 現代日本人の意識構造 第三版 NHK ブックス
相良亨 1984 日本人の死生観 ぺりかん社
総務庁青少年対策本部 1995 青少年の意識の変化に関する基礎的研究
SPSS Inc. 1995 SPSS Base System 統計編 Release6.x.SPSS Inc.
Vernon,G. 1972 Death control. *Omega, 3, 131-138.*
Wong, P.T.P, Reker, G.T, Gesser,G. 1987 Death Attitude Profile-Revised : A Multidimensional Measure of Attitude Toward Death. *Robert A.Neimeyer Death Anxiety Handbook p121-141*